「幼いイエスの聖テレーズ」　1961 年製作の映画　女子パウロ

“沈黙する神の呼びかけを聞く”

1950 年ごろまで、シスターは大きいベールを頭からすっぽり被って外部の人に顔を見せませんでした。

修道院には外部の人は入れないし、まして撮影となるとローマの特別な許可がいりました。

今回の映画作成にあたっては、特別な許可をもらいました。

テレーズの最後の寝室（修室）には、わらぶとん、腰掛け、生涯の思い出を記した木の箱ふだけ。

1873 年 1 月、フランスのアランソンでテレサ生まれる。父は宝石商。母はアランソンレーズを編む、９番目の子供の子でした。

「神様が喜ばない、小さなわがままも嘘もよくない」と厳しく躾けられました。

テレーズは怖がりだった。ある日、1 人で２階に行くように母親に言われた。

「お母さんの言いつけに背いて悲しませたくないし、でも怖い。」

困ったテレーズは、いいことを思いつきました。階段を１段登るごとに「お母さん」と大声で呼ぶことにしました。お母さんは、その度に答えてくれました。こうしてテレーズは臆病に打ち克つ事が出来、２階まで行けました。

「誰かを悲しませたくない、喜ばせたい。」テレーズはいつもそう思っていた。

誰かを悲しませたとすると、すぐに大粒の涙が出ましたた。「ごめんなさい」を繰り返し、許して貰えるまでは安心できない子でした。

４歳の時にお母さんが亡くなり、リージュに引っ越します。

質素でも家族が助け合う生活でした。

テレーズは、すぐ上の姉のセリーヌを真似て学校での成績は良かったけれど、意地悪をされてますます引っ込み思案になりました。

ですので彼女は、1 人で考え事をするときが多かった。「何してるの？」と聞かれると「考えます。神様のこと、天国のこと。この世が過ぎていくこと。人の一生はすぐ終わることなどを考えてます」と答えた。

お父さんが学校に迎えに来るといつも抱きついた。でも、テレーズの心はもっと大きなものに開かれていった。

13 歳の時にカルメル会の召し出しを感じました。

「1886 年のクリスマスに完全な回心の恵みをいただきました。真夜中のミサが終わって家に戻ると、私は暖炉に靴を取りに行きました。パパは、靴の中の贈り物を私が一つ一つ取り出すのを見る

のが好きでした。それが幼い私には本当に幸福なひと時でした。しかし、幼年時代の欠点から成長させようと思ったイエス様は、この無邪気な喜びをお取り上げになりました。」

ごミサで疲れたパパは「ありがたいことだ。これも今年が最後が」と呟いたのです。
私はその時、帽子を脱ぎに２階に登っていくところでした。
私の感じやすさを知っているセリーヌは、私の目に涙が浮かんでいるのを見て泣き出しそうになり「ああ、テレーズ。すぐに降りてきてはダメ。いま靴を見たらきっとたまらなくなるでしょうから。」と言いました。
けれどもテレーズは、もう前のテレーズではありませんでした。
イエス様は、テレーズの心を完全に変えておしまいになったのです。心臓がドキドキするのを抑えて、靴の中から贈り物を取り出しました。
パパも笑い出し、すっかり朗らかになりました。
テレーズにははっきりわかりました。「イエス様は私を人間の魂を漁る者とされたのです。わたしは罪人の回心のために働きたいという大きな望みを感じましたが、それはかつて感じたことがないほど激しい望みでした。」

彼女は、この広い世界で自分を必要としていることを疑わいませんでした。

パリのノートルダム寺院に生きる希望を失った１人の青年がいた。そこで彼は突然信仰の恵みを受けた。彼の名は、ポール　コローデ。永遠の神のみ子に触れ、胸が張り裂けそうな思いがした。
パリ、軍人から突然回心したシャロルド　フコー。「1886 年のクリスマスが、私の生涯の最初のクリスマスだった。」
同じ頃、オランダからパリに貧しい画家が着いた。彼の名はヴィンセント　ヴァン　ゴッホ。
「神を信じる人は、遅かれ早かれ、回心の時が来るのを待っている。」と語っている。

1887 年　テレーズは、死刑宣告人のために、祈る生活に入っていた。
「15 歳になったら、２人の姉がいるカルメル会に入りたい」と願うようになった。

1887 年の聖霊降臨の大祝日の日、庭にいた父に、涙ながらに決心を打ち明けました。
「重大な決心をするには、あまりにも若すぎる」と反対した父も、ついに承諾してくれました。
パパは高い塀のそばにいて、白い小さな花を摘み、神様がどのようにこの花をお咲かせになり、お育てになったか説明してくれました。私は、自分の生い立ちを聞いているような気がしてなりませんでした。

テレーズは、モンティーニ婦人を殺した男（プランティーニ）が、死刑判決を受けてもなんら悔いる様子がないことを父親から聞きます。

ある日曜日、罪人たちに注がれるキリスト像のおん血を見て、彼女はプランティーニを霊的な子どもとしました。
14 歳のテレーズがプランティーニのために祈り続けた。
死刑執行の翌日の新聞に、突然プランティーニが十字架に接吻した記事を読みました。祈りの力を知った彼女は、この時ほどカルメル会にな入りたい、と思ったことはありませんでした。

しかし、テレーズは入会のために手続き（年齢が若くて条件を満たしてないので）をしなければなりません。髪を結って大人っぽく見せようとしましたが「若すぎる」と却下されました。そして直接、教皇様に願い出ることにしました。
教皇様の前でひざまづいて、直接、入会の許可を願いしました。
教皇様からは「神様のみ旨なら入れるでしょう」という返事でした。

「修道院に入れば青い空の一隅しか見れません。そうなっても、偉大な召し出しを決して忘れまい。」とテレーズは誓いました。

1888 年 4 月 9 日、15 歳になったテレーズは、カルメル会の修道院の門をくぐります。
「心臓がドキドキしすぎて、死ぬのではないか？」と思いながら院内を進んで行きました。なんの儀式もなく、彼女がすぎると修道院の門は閉ざされました。父親が彼女を祝福したのはこれが最後でした。
数日後、最初の発作が父を襲ったのです。

「私の魂は、深い、平和な甘美に浸りました。それはとても言葉には表せません。この心の平和はどんなに厳しい試練の時にも失ったことはありません。」

テレーズは院長様の後を、修道院をついて行き、院内を案内してもらいました。
それから、毎日毎日、修道院の定められた日課を過ごしました。共同の祈りのために、この廊下を通ってかたいしょ（？）に行きました。
修室（個人の部屋）で 1 日の大半を、祈りと手仕事で過ごしました。

「修道院の中は、何もかも気に入りました。ことに私どもの小さな修室には、すっかり心を奪われてしまいました。私の喜びは穏やかで、私の心の青空には一点の雲もありません。どれほどの深い喜びをもって、いつまでもいつまでも私はここにいると、繰り返したことでしょう。」

1889 年 1 月 10 日、16 歳になったテレーズは、修道服を受け、翌年の初誓願には、**幼きイエスと尊き面影**、という修道名を準備しました。
（リージュから）カルメル山に移しかえられた**小さい花**は、十字架の陰に花を開かなければならな

くなりました。
イエス様の涙と血は、その露となり、涙に覆われた尊い面影がその太陽だったのです。

単調な修道院の生活でしたが、どんな勤めも疎かにせず一つ一つを大切にしました。彼女はそういった道を、**“小さな道”**と名付け、導かれていきました。

着衣式のすぐ後、食堂の係になりましたが、それは自愛心を打ち砕く多くの機会を与えてくれました。
「イエス様は飢えていらっしゃいます。愛に飢えていらっしゃるのです。」

1890 年 9 月 8 日、テレーズは初誓願を立てました。無味乾燥と自分の召し出しに対する、深い疑いのために誓願のための準備をしました。

「その夜、私の幸福は時が運び去ってしまうものではないと感じていました。この日は、何もかもが小さく感じられましたが、私がいただいたお恵みと平和、それから夜、大空に瞬く星を見ながら感じた幸福は、大きなものでした。私の恍惚となった目に、もうすぐ美しい天国が開けて、永遠の喜びのうちに天の花婿と一致することができるのだと考えていました。」

テレーズの修道生活は、明け方の 1 時間の念祷に始まります。
父親の苦しみを絶えずイエスのご受難と重ね合わせていました。
「私たちはイエス様のみ腕に抱かれているのです。かつてご自分のためにお選びになったのと同じ道を、主は花嫁たちにもお選びになるのです。」

1894 年の初頭、テレーズは胸に痛みを覚えましたが誰もそのことに気づきませんでした。彼女は、修道院の中で“一粒の砂”であることしか望みませんでした。
「望むことはただ一つ、忘れられ、無視されること。」

修道女たちとの共同の洗濯場での出来事
日々の勤めの中に、他の修道女なら怠りそうな犠牲を彼女は怠りませんでした。
彼女はそれを実行しながら微笑んでいます。
「ある時、洗濯場でハンカチを水から引き上げるたびに、汚い水をわたしに跳ね上げるシスターと隣り合わせになりました。顔を拭きながら私は思わず後ずさりしようとしていました。けれどもこれだけ惜しげも無く与えられる宝を断るのは本当に馬鹿なことだと思い直して、心の闘いを表に出さないようにつとめ、できるだけ汚い水をたくさんかけられたいと望みました。そして、こんなにも恵まれた場所に、この次も来ようと心に誓いました。」

マロニエの奥に、共同の墓地があります。彼女はもはや死を、望みも拒絶もしませんでした。
黙々と院長様から与えられた仕事をすることしか頭にありませんでした。
テレーズは、「どんなに良いことをしてもそれは神様がなさることで、自分はその道具に過ぎない」と思っていました。彼女は、自分がイエス様の手にある最も小さなおもちゃと考えるのが好きでした。

もし彼女が英雄的な行為を夢見たとすれば、それは院長様のお祝いの日、仲間の修道女と演じたジャンヌダルクの姿でした。
「ジャンヌダルクの物語は私を引きつけました。私は、ジャンヌに倣いたいという望みと勇気を感じました。しかし、主は、別のもっと尊いこと、もっと輝かしいことに私を呼んでくださいました。私の夢は、滅びゆく王に戴冠させることではなく、人々に天の王を愛させること。人の心を永遠の王に導くことなのです。」

テレーズは、恵みの召し出しを父親に打ち明けた日以来、「恵みの太陽であるその花が、その命を密かに開花させ、成長させることを望んでいる」と知っていました。ですから、修練女を受け持つようになっても（修練長？）自分が若いということに恐れを抱くこともありませんでした。

「砂時計を見るたびに、流れゆく時は人間の知ることができない神の愛の時であることを思い、神の慈しみを知らないすべての人に、その身を捧げたい」と考えていたのです。
1895 年の聖三位一体の祝日の彼女の奉献文は彼女の生きている意味とまもなく訪れる彼女の死の意味を表すことになります。

「神はおん独り子、私の救い主。私の天の花婿として与えるほど、私を愛してくださったのですから、おん子の功徳の限りない宝はすべて私のものです。それゆえ私は喜んで、それを神に捧げます。どうぞ、イエスの尊い面影を通してだけ、また愛に燃えるみ心の内にだけ私を眺めてください。命の夕べに私は空の手で神のみ前に出ることでしょう。私は、神おん自らの姿を見にまとい、神ご自身を永遠に我が物にすることを願っております。私は完全な愛の行いをしながら生きるために、神の憐れみ深い愛に、自分の身を生贄としてお捧げいたします。どうぞ、絶え間なく私を焼き尽くして主、イエス・キリストの愛の殉教者とならせてください。おお、私の神よ。」

テレーズは、宣教師への祈りの援助を頼まれるとすぐに引き受けました。アフリカ、中国へ出発した宣教師が霊的兄弟になりました。
「直接の宣教は出来ませんが、私は愛と犠牲によって宣教師となることを望みます。」

心の深い闇と、体の衰弱がいちどきにテレーズを襲いかかっていました。

「私は喜び踊っていました。あの頃私の信仰は生き生きとしていてので、天国の考えは私の幸福のすべてになっていました。」

1896 年聖木曜日から聖金曜日までにかけての夜、23 歳になったテレーズは真夜中まで、ご聖体の前にとどまった後、修室に戻りました。

カルメル会の四旬節の厳しい断食を守りましたが、これほど元気に感じたことはかつてないほどでした。わずかな水とパンだけでその日から翌日まで過ごすことを喜んでいました。彼女の心にしみたその夜、ヨハネ福音書（13：１～）は次のように始まります。
「過越祭の前のことであった。イエスはこの世から父のもとへ移るご自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上ない愛をお示しになった。」

「頭を枕につけたかと思うと間も無く、私は何か潮のようなものがこみ上げ、泡立ちながら口びるまでのぼってくるのを感じました。もしかしたら死ぬのかと思って、私の魂は喜びでいっぱいになりました。けれども、ランプはもう消してありましたので、幸福を確かめるのは朝まで待たなくてはなりませんでした。待つほどもなく朝となり、目が覚めた私は窓に近づいてみますと、果たして私が思っていた通り血を吐いたことが分かりました。ああ、私の魂は大きな慰めに満たされていました。」

しかし、この喜びは２日間しか続きませんでした。
「私の魂は濃い暗闇に包まれ、あれほど甘美だった天国への思いは、闘いと苦悩の種になりました。この試練は、神様がお決めになった時がくるまで終わらないはず。そして、その時はまだ参りません。」

深い闇が彼女を襲います。
悪魔が「喜んで死ぬがいい。だが、主はお前の希望しているものを与えてはくれまい。それどころかもっと深い、虚無の闇を与えてくれるだろうよ。」と叫んでもますます信仰のわざに励むのでした。

自分の召し出しに忠実であったテレーズは、この闘いと苦悩の苦味に満ちたパンを聖化してくださるよう、神様に願いました。

「神よ、あなたの子どもはあなたのお望みになる間は、いつまでも苦悩のパンを食べることを甘んじてお受けいたします。そしてあなたがお定めになった日が来るまでは、あわれな罪人たちが食事するこの苦味に満ちた食卓から立とうとはしません。おお、イエス様、人々によって汚された食卓が、あなたをお愛しする一つの魂によって清められますように。私はあなたの栄光に満ちた国に導

き入れていただくまで、ただ一人でこの試練のパンを食べ続けましょう。ただ、私があなたに申し上げるたったひとつのお恵み、それは決してあなたに背かないことです。」

テレーズの病状は悪化し、やがて修室でしか仕事ができなくなりました。1897 年 6 月、院長様は生涯の思い出を再び書き続けるように命じました。それが 2 冊目のノートになります。
テレーズは、わらの布団に乗せられて病室に移りました。最後の日々、苦痛と闘いながら一歩ずつ登ったこの階段ももう登れなくなりました。

ベッドの周りでは、３人の姉妹がテレーズの言葉を書き写します。

「テレーズは死を恐れなかった、と想像する人もいるでしょう。
私が他の人々以上に守られているとどうして言えましょう。聖ペトロのように、私は主を決して見捨てません、と申しません。」

テレーズはますます衰弱し、ペンを使うことができなくなりました。しかし、院長様が命じた生涯の思い出のノートは、鉛筆で書き終えることができました。
そして、最後に、もう一度、修道院の回廊でテレーズは外の空気に触れ、姉テレーズはそこで写真を撮りました。

彼女はとても苦しみました。
「イエス様は苦しみのうちに十字架の上で亡くなりました。でもそれは、かつて見たことがない美しい愛の死でした。私は打ち砕かれて、神様の麦の粉とならなければなりません。主の無限の憐れみを必要とする私は、なんて幸せなのでしょう。」

８月中ば、テレーズはひどい渇きに陥りました。もう僅かの食べ物しか口にすることが出来ません。やがて、聖体拝領もできなくなりました。彼女は、ノートに最後の言葉を書きました。

「信頼と愛によって」

その年の夏、豊かな収穫から一粒の麦の穂がテレーズのもとにもたらされました。
「この麦の穂は、私の魂を表しています。神様は私を恵みで満たしてくれました。私自身と多くの人々のために。」

1897 年 9 月 30 日、テレーズは 24 歳の生涯を閉じました。

テレーズは、臨終の苦しみの中でテレーズは言いました。

「おお、私は愛である神様にこの身を渡したことを後悔していません。」

カルメル会伊達修道院　奥村一郎神父氏の解説

聖テレジアは、深い、あるいは高い、カルメルの霊性を日常、卑近の中に溶かし込んだ、というかそれを生きた。神秘的な世界が卑近の中に、日常の中に生きられるのだということを、身を以て証した事において、私たちにとって貴重な存在です。

実際テレジアは、宣教の保護の聖人とされている。囲いの中という狭いところで、僅か 10 年足らずの人生、自分たちだけの限られて生活をしていたのに、世界中のミッションの守護の聖人にしたことは非常に意味がある。宣教は、神に向かう強烈な求心性がある。それが人に向かう遠心性に向かう原動力になる。形としては目に見えない姿ですが、実際テレジアは「私は隣人を愛することですべての人を愛します。」と言っていた。ですから、私たちも形としては活動会の人たちは多くの人と関わりに向かうし、観想会は神に向かう形になる。テレジアは、「私は教会の中の心臓です」と言ってましたけれど、教会にはそうした２つの役割分担がある。心臓が外に出たら死んでしまいますが、何かこう内に包まれて、心臓をよく動かしていることが体全体の機能を良くする例えにもなる。

日本人は単純さ、そして、透明さ、自然を愛する心の傾きがある。それが祈りの中に、染み通っていたし、その祈りがキリストのものとして愛に燃え尽きていったことがテレジアの生き方であった。日本人には親しみやすいものであったと思います。